

札幌市子ども・子育て会議 若者支援施設在り方検討部会

会 議 録

日 時：2025年1月21日（火）午前10時開会
場 所：大通バスセンタービル2号館2階 子ども未来局大会議室

1. 開 会

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 定刻前ですけれども、皆さん、おそろいになりましたので、これより始めさせていただきます。

札幌市子ども未来局子どものくらし・若者支援担当課の引地でございます。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

議事に入ります前に、本日の確認事項と報告事項を申し上げます。

1 点目は、会議の公開についてです。

当部会は公開で開催することとなっており、本日は報道の方もお越しいただいておりますので、ご承知おきください。

それから、本日の議事の概要は、後日、札幌市のホームページに公開いたしますので、併せてご承知おきいただきたいと思います。

2 点目は、出欠状況でございます。

本日は、全ての委員にご出席をいただいております、会議が成立していることをご報告いたします。

この後、議事に入ってまいりますけれども、記録作成の都合がありますため、皆様、本日もお手元にあるマイクをご使用になってご発言をお願いしたいと思います。

それでは、議事に入ります。

議事の進行は、永浦部会長にお願いいたします。

2. 議 事

○永浦部会長 皆さん、おはようございます。

早速ですけれども、議事を進めてまいります。

次第にありますとおり、本日の議題は、基礎調査で把握された課題への対応（意見、提案）についてです。

前回の部会では、事務局から五つの討議事項が提案されておりました。委員の皆さんから追加の提案がある場合は年末までにご連絡いただくこととしておりましたが、特に提案はございませんでしたので、本日は、事務局提案の5項目について議題としたいと思います。

前回から時間も経っていますので、振り返りもかねて、事務局から説明をお願いします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） それでは、お手元のA4判横の資料1をご用意ください。

本日、ご意見をいただきたい事項は、ご覧の5項目になります。

では、早速、2 ページ目をお開きください。

一つ目は、学校等から離れた子ども・若者に、途切れることなく支援を行っていくために、どのような対応・取組を行っていく、あるいは強化していくことが考えられるかです。

ヒアリングでは、様々な方面から、家族の問題や本人の社会適応の問題などで支援を必

要とする子ども・若者が、学校を離れ一時的な所属を失った後に、支援が途切れてしまいがちであることを懸念する声が聞かれました。

また、一度支援が途切れた場合に、再び支援につなげることの難しさを指摘する意見、若者支援施設に学校からの支援のバトンの引継ぎを期待する意見も多く頂戴しました。若者支援施設では、現在も資料に記載の取組を行っておりますが、なお、つながることができていない子ども・若者がいると感じています。

ヒアリングでも、資料に記載のような提案をいただいているところですが、途切れることなく支援を行っていくために、どのような対応や取組が考えられるか、委員の皆様からのご意見、ご提言をいただきたいと思います。

続きまして、二つ目に移ります。

二つ目は、地理的・経済的事情から、若者支援総合センターの自立支援事業に結びついていない若者に対して、どのような対応を行うことが考えられるか。若者支援総合センターと若者活動センターは、どのような役割分担が適当かです。

現在、若者支援総合センターでは自立支援事業を中心に、若者活動センターでは若者の交流や活動支援を中心に運営を行っていますが、ヒアリングでは、経済的理由から総合センターの自立支援事業を紹介できないという声が複数聞かれました。

このような若者の利用を考えると、活動センターにも自立支援の機能を持たせることが考えられますが、資料のとおり、現在の総合センターが持っている①から③までの全ての機能を持たせるほど量的なニーズがあるのか、分かりません。総合センターと活動センターはどのような役割分担が適当か、つまり、現在の総合センターは自立支援事業中心、活動センターは交流活動支援中心のままでよいのか、活動センターも何らかの自立支援機能を持つ場合、現実的にどの程度の支援をどのような手法で行っていくことが考えられるか、以上についてご意見をいただきたいと思います。

続きまして、4ページをお開きください。

三つ目は、これからの若者支援施設のロビーはどのような役割を果たし、そのために、ハード面でどのような整備が望まれるかです。

利用者アンケートでは、若者世代にとって、若者支援施設に必要と思う機能の第1位が「自習／趣味／お喋りなど、誰でも気軽に立ち寄れる居場所の提供」となりました。支援者ヒアリングでは、ロビーでの普段のスタッフとの関係性を入口とした支援のスキームを評価する声、発展させることを期待する声を頂戴しました。

この項目につきましては、1点目として、改めてロビーが果たすべき役割、提供すべき機能と言い換えてもいいと思いますが、ロビーの役割、機能についてご意見をいただきたいと思います。その上で、2点目として、その役割・機能を果たすために、どのようなハード、施設整備が必要と考えられるか、ご意見を下さい。

続きまして、四つ目です。

区の保健福祉部門といっそう有機的に連携し、支援の相乗効果を発揮していくためには、

どのような方策が考えられるかです。

若者支援施設と区役所の保健福祉部は、ともに高校生年代の子どもや生活に困窮する若者を支援の対象としている点で、支援の領域が重なりますが、現状では、若者支援施設の取組は区の保健福祉部に十分認知されているとは言えず、連携の実例は資料に記載の程度にとどまっております。

こども家庭庁発足以降、これまで以上に、ライフステージを通した切れ目のない支援が求められており、区役所の保健福祉部の中では、妊娠期、乳幼児期から学齢期への支援の接続の強化が進んでいます。その上で、これからは、学齢期から若者期への支援の接続強化も考えていく必要があるという声が、児童福祉サイドからも上がっています。

現状では、行政が区を対象区域としているのに対して、若者支援施設は、総合センターが札幌市内全域を、活動センターは対象区域が明確ではないという現状がございます。また、若者支援施設と区役所は、施設や庁舎が物理的に離れているというような面も連携が進みづらい一因と考えられますが、このような中で、例えば、どのような体制・手だてを講じれば、連携が進み、支援の相乗効果を発揮できるか、ぜひ委員の皆様からのご提言をいただきたいと思っております。

6 ページをお開きください。

最後、五つ目は、札幌市全体が厳しい財政状況にある中で、持続可能なかたちで施設を更新していくためには、どのような方策が考えられ、その場合、どのような点に留意すべきかです。

具体的には、現在の若者支援施設が提供している機能、貸室、ロビー、自立支援、若者の交流促進・育成支援の大きく四つについて、方向性として三つ、拡大、現状維持、縮小、いずれの方向性が適当か。また、その場合の留意点についてご意見をいただきたいと思います。四つの機能のうち、ロビーと自立支援については、これまでの四つの項目の中でもご意見をいただきますので、この5番目の項目では、特に貸室と交流促進・育成支援について、ご意見を頂戴できればと思っております。

事務局からの説明は、一旦以上となります。

○永浦部会長 五つ事項があるので、順番にご意見を伺っていききたいと思います。

今回、意見、提言ということですので、それぞれ1番から順番に発言いただきまして、質疑や補足があれば事務局に対応をお願いしたいと存じます。

それでは、早速ですけれども、1番目の学校等から離れた子ども・若者に、途切れることなく支援を行っていくために、どのような対応・取組を行っていく、あるいは強化していくことが考えられるかについて、ご発言がある方はお願いいたします。

○工藤委員 1番は学校等からということですので、学校関係者としてお話をさせていただきます。

教育分野の中学校年代をご覧くださいますと、「中学校3年生への、若者支援施設の紹介」と書いているかと思えます。これまで携わってきた立場としましては、ここが本当に

紹介程度で終わっているといいますか、特に心配なお子さんの親御さんに、昼間の中学校を卒業してうまくいかないようなことがあったときに、こういう相談施設がありますよということで紹介はするのですが、それだけでは弱いのではないかとということが自分の中でも課題意識としてあります。本当はもっと早い段階から、要するに、中学生の段階から将来困ったときに自分を支援してくれるところがあるのだということを、もっと強く知っておくことが大事だろうと思っています。

それから、高校生の年齢になってからいろいろな困りが発生する若者もいるとは思いますが、もしかすると、その多くはもっと子どものとき、小学生や中学生もしくはもっと前から困りがあって、困りを抱える中でずっと子ども時代を育ってきたという子どもたくさんいるのではないかと思ったときに、場合によっては、小学校段階、そして、中学校段階から、自分を支えてくれる施設があるということをもっとPRできる、つながりを持てるような取組が若者支援施設でなされるようになると、子どもたちも安心して生活していけるのではないかと、そして、困ったときにこういうところがあったなということで相談に行けるのではないかと思うのです。

やはり、自分から一步を踏み出すのはなかなか大変ですので、例えば、学校にアウトリーチしてもらって、そこで関係性をつくりながらということであれば、実際に若者になったときにも相談に行きやすいでしょうし、それがなくなかなかつながっていかないという部分があろうかなと思っています。

5ページの4番のところでも、行政サイドとしてもそのよう乳幼児期から学齢期の強化が進んでいて、この後、学齢期から若者期への接続が課題になっているというお話もありましたので、教育、学校を起点としながら子どもたちを支えられたらいいのかなと感じているところでございます。

○永浦部会長 こういったところがあることを、学校にいるうちから知ってもらえるようなPRが必要ではないかというご意見をいただきました。

ほかにございませんか。

○金委員 まず、今現在、学校に通うことができない子どもが増えている状況を考えると、必ずしも、学校に戻すことがゴールではないとは思っているのです。そういう意味で、学びを続けることができるような体制を備えることが大事であって、最近、大学受験をする生徒の割合を見ると、通信教育を受けた子が増えている状況です。

その認識を踏まえて言うと、これからの総合センターの中では、通信教育を受けられるようなガイダンスであり、学校を卒業するのではなくて、学歴を取れるようなやり方をサポートしていく体制がより大事なかと私は思っています。

○永浦部会長 それに関連して、私も自分の立場からお話しさせていただきます。

今、おっしゃったように、不登校や、学校に必ずしもマッチしないけれども、成長を続けていく学齢期の子どもが増えているというところで、私はスクールカウンセラーを経験しているのですが、中学校が終わって卒業したときに相談が終わりまして、では、この子

を次はどこにつなごうかと。精神疾患とか障がいではないから病院は違うなど。でも、私立の学校だとカウンセラーが少なかったり、通信だとか関わる機会がないとなったときに、どこを紹介してどうつないだらいいのかというのはすごく悩みながら支援をすることがありました。

今、子どもの教育業界では、子どもにＳＯＳを出させましょうという援助要請の教育が進んでいるのですけれども、そのスキルの部分よりも場所をどこにしたらいいのだろうというところはすごく大事だなと思いました。学校もそうですけれども、それにプラスして、医療や教育などのいろいろな専門家にもこういう施設がありますよと学校と合わせてＰＲしておく、関わっている人たちが、では、若者支援と連携してみようかというふうに思いつけるのかなと思うのです。そのあたりも学校にプラスして専門的なところへのＰＲも必要なのかなと私も感じた次第です。

ほかはいかがでしょうか。

○荒木委員 今の学校に通えなくなった子どもたちにどういう支援が必要かというお話ですが、私自身は、あえて極論を言わせていただくと、学校の延長でいいのかなと思っています。大人の社会の中でがんじがらめになって、大人たちがあっち行け、こっち行けと言っている、このシステムがっらい子どもたちがたくさんいると思うのです。

その中で、今議論している若者支援施設は、大人社会から逃れる大事な第三の居場所ではないかと思っています。だから、そこに行けば子どものユートピアがあるみたいな場所であることが分かったら、行ってみようかなという子どもが逆に増えるのではないかと思います。

今の社会の問題は、がんじがらめになった教育システムに、私たちが何とかして乗せようとしているというからくりではないかと思っています。その中で、若者支援施設がぽっかり抜けられる場所になり得る可能性があるのではないかと、そっちのアピールでいったら、子どもを救う新しい場所として形になっていくのではないかと考えています。そのためにも、この若者支援施設に行ったら子どもはどんな支援が受けられるのかが明確である必要があって、それは学校の延長ではないような見せ方がすごく大事ではないかなと思っています。

特に、今、支援を必要とする子どもたちというと、どうしても障がいを持っていたり、一般の子どもたちよりも能力が低いというところに手を差し伸べるという話が出てくると思うのですけれども、私が大学で出会う不登校経験のある子どもたちは、多くの場合はギフテッドです。どっちかという、能力があり過ぎて、それで話し過ぎていじめられて行けなくなったと。お母さんたちも最近はいろいろ勉強されているので分かっていて、だったら、学校に行くのはやめなさいと言っているのです。そういうことで、例えば、出来過ぎている子たちが若者支援に行ったら自分の可能性を開けるというモデルがあったら、何か違うものが見えるのではないかなと思いました。

○永浦部会長 今、荒木委員からご提案いただいたように、学校とかメインの流れから紹

介してもらったから安心というケースと、それだとしんどいな、だから、少し外部性といえますか、ああ、ここだと、もっともな意見を言われなくて自由に振る舞える、自分らしく生きられるのだ、みたいな思いやイメージを持っていると、より行きやすくなる若者もいるのではないかとこのところで、機能もそうですけれども、そのPRの仕方とか、どのルートでやるかも非常に大事になってくるご提案かなと思います。

ほかにございませんか。

○工藤委員 荒木委員から大変いいお話が伺えたなと思っています。

先ほど自分がお話した件と関連するのですけれども、学校は学校でそれなりの価値があると思うのですけれども、そこがなかなか難しく、もう一つ、サードプレイスという場所が子どもにとってもとても大事で、高校生になると、若者支援施設、センターがあって、そういったところで息抜きができるのですが、案外、小学生、中学生はあまりないのです。児童会館で遊んだりということはあるかと思うのですが、悩みを相談できるような学校以外の通える場所、気が楽になれる場所が案外ないのかなと思っていて、そういった機能もどこかで整備が必要ではないかなと感じるところがありました。

○永浦部会長 だんだん発達段階が上がっていく上で、大人のルールというよりも、自分らしく、自分探しというところになると思うので、そのバランスが若者支援の在り方についても一つの柱になる、今いただいたご意見を基にそう考えています。

ほかにいかがでしょうか。

○大澤委員 大体皆さんからの意見でいいかなと思ったのですが、一つだけ申し上げます。

一つは、学校とつながるのはとても大事なことです。不登校の問題もすごく大事で、うちの真ん中の子もそうですので、切実な思いがあります。ただ、やはり学校とつながるというのはかなり大多数の子どもとつながる可能性があるので、この部分との連携というのは一つの柱としてどうしても切り離せないというのが一つです。

特に、学校のところでつながるというのはどういうことかという、多分、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど、いろいろな形で学校内部にも支援と接続できる人がいるわけですね。やはり、学校内部だけで対応し切れないような問題があって、学校現場を離れる前にキャッチをして若者支援につなぐということが必要だと思うので、学校内にいる学校内で対応し切れない課題を抱えた子どもたちとの接続が、やはりこの若者支援総合センターの役割としては一つ大事なかなというのが1点です。

それから、不登校の問題で考えると、金委員がおっしゃった通信教育を受ける場所を提供することはすごく大事ななと思っています。勉強を教えることそのものを抱え込むかどうかというのは非常に大きな問題なので難しいなと思うのですけれども、教育を受ける場所を提供して、そういう形で来られるようにするというのはすごく大事な役割だと思うのです。やはり、学校とつながると同時に、つながっていない不登校の子どもたちの場所であるというものが二つ目の柱としてどうしても必要かなと思いました。

そう考えると、今のセンターは遠いのですよね。私の真ん中の子は不登校で、今も半分

そうですけれども、連れていこうかなと思ったときに、センターが遠くて、連れていけるところが身近にないのです。ですから、センターだけでそれを担うのが難しいので、例えば、不登校で学校に行けていない子たちが日中の学校が終わる前の時間帯で通信教育を受けるために児童会館が場所を提供すると。センターの役割として、不登校の子どもたちや学校に居場所をなかなか見つけられない子どもたちの支援をするというものがあるのだけれども、全部をセンターで抱え込むというよりは、そこが中継点になって、児童会館などがサポートできるような分担をつくっていく必要があるかと思いました。

これはもう余談ですけれども、知らない場所、知らない人のところに相談に出向く心理的ハードルは高いですね。それは、よく分かります。私も関わっていて、おいでよと言ってもなかなか来ないのです。例えば、SNSやメールで相談がつながったら迎えに行くと。アウトリーチで見つけることももちろん大事ですが、そこに行って見つけるアウトリーチと待っている対応の二つではなくて、何となくつながったら迎えに行く、一緒に連れてくるというような対応の仕方もプラスアルファとして必要かなと思いました。

○永浦部会長 ちょうどコロナ禍のときに、大学生が実家に戻らなければいけないと。ただ、実家に帰ったら、あなたの部屋は片づけましたと。おじいちゃん、おばあちゃんがいる中でオンラインの授業を受けると、うるさいと。そういうことで勉強する場所がないということが意外とあったのですよね。

多様な家庭があるので、学びの場所を提供するとなると、通えるという問題になってくるので、そこも柔軟に対応できればというご意見でした。

ほかにございませんか。

○オブザーバー（松田） オブザーバーの立場ですので、私の意見ということではなくて、私が20年来、この若者支援施設にいますので、事実関係のご紹介や情報提供をさせていただきます。

若者支援施設は、今のY o u t h +（ユースプラス）になる前は、勤労青少年ホームという厚生労働省になる前の労働省が所管する施設で、10代の働く若者の余暇支援という位置づけでした。レッツという愛称で、私が入職したのもそこで、若くして働いている10代に、仕事の後の夜の時間に息抜きを提供することで、あしたからまた頑張って働こうね、あるいは、早期離職を防ぐという、働く健気な若者への労働福祉の施設でした。

それが一定程度役割を終えて、現在の若者支援施設に変わるときの節目にもいたのですが、どうしても、その節目のときに勤労青少年ホームを引きずるといいますか、その流れで、対象は義務教育終了後だよねというのが何となく自明のまま残っていたのです。つまり、労働行政から来たので、学校との重なりはタブーとまでは言いませんけれども、ニート、ひきこもり支援はあっても、不登校は違うといった事実として、あくまで労働から見た若者行政だというところが少し尾を引いていて、中学校の先生とも話をしていると、そちらは卒業しないとお世話になれないのですよね、仕事の相談でないとできないのですよねということを聞くことがしばしばありました。そういった歴史的な背景から、学校段

階とは別という、原則義務教育終了後というものがまだどこに残っているのかもしれないという背景だけ伝えさせていただきます。

○永浦部会長 実際の状況が分かりました。また、今の見直しで対象をどうするのか、すみ分けは大事ですけれども、それも含めて考えていきたいと思います。

五つの事項がございますので、次に進みたいと思いますが、前のところに関連があれば、それも踏まえてご発言いただいて結構です。

事項の2番目、地理的・経済的事情から、若者支援総合センターの自立支援事業に結びついていない若者に対して、どのような対応を行うことが考えられるかについて、またご意見いただければと思います。

先ほどの事務局の説明では、現在、総合センターは自立支援事業が中心、活動センターは若者の交流活動支援が中心ということだったのですけれども、このままでよいのか、活動センターも何らかの自立支援機能を持つ場合は、現実的にどの程度の支援をどんな手法で行っていくことが考えられるかという点について、意見をいただきたいということでした。

どなたか、ご意見、ご発言があればよろしく願いいたします。

○大澤委員 この間、視察あるいは様々なアンケートやヒアリングの結果を見る限り、やはり自立支援事業の必要性というものは相当あって、これを拡充するという方向性が求められているだろうと思いました。

だから、そういう点で自立支援事業をどうするかと考えたときに、当然、縮小はあり得ないと思っていて、現状維持を考えても、やはり皆さんの意見から考えると、今のままの現状維持だと、中心の若者支援総合センターでつなぎ止められないというか、そこにつながつてこない子どもたちもいるという意見がかなりあります。ですから、総合センターだけではなくて、若者活動センターにおいても自立支援事業を拡充していくような方向性が、やはり今回のヒアリングなり視察の結果から求められているのではないかなと思いました。

ですから、それをどうするのかというのはすごく難しいところだと思うのですけれども、やはり若者支援総合センターの自立支援機能を若者活動センターにも拡充するという方向性が一つ求められているかなと思います。

先ほど、松田オブザーバーが歴史の話をしてくださって、勤労青少年ホームから始まったという話でしたけれども、私もその論文を幾つも読んだことがあって、歴史的経緯はそうだったなと今思い出したのです。その勤労青少年ホームの余暇支援が今の若者支援施設に変わっていくときに、やはり余暇支援だけでは駄目なのだと、様々な課題や困難を抱えている子どもたちの支援を新たな使命としてくっつけていくというふうな方向性で少し変わってきたと思うのです。それをどうするかという議論ですから、それをやはり拡充するのだということが次のステップとしては必要かなと思っています。

○永浦部会長 活動センターも交流活動支援中心から自立支援を拡充していくことが必要ではないかというご提案をいただきました。

ほかにございませんか。

○荒木委員 今の大澤委員の自立支援の拡充が必要というところで、私も本当にそう思っているのです。

では、何を支援するのかというところで、精神論というか、自立するためにじっくりお話を聞いて、その子が少しでも心の成長をするようにというものはやはり難しいのではないかと思います。今の子どもたちを見ていると、例えば、ここに来れば具体的に何か知識が得られたり、何かスキルが身につくので、行ってみようというふうになると思っています。例えば、今は個人起業家が増えていたり、音楽で言えば、Mr s. GREEN APPLEのボーカルの方は若いときに学校に行かないでずっと音楽活動していたそうですね。ですから、若者が本当の意味で自立できるようなプログラムがあるところだと、自然に足を運ぶのではないかと思ったので、提案してみました。

○永浦部会長 自立支援機能がどんな内容だと利用してもらえるかというご意見でした。

やはり自立支援機能については拡充をしていくというところで、今、荒木委員からお話いただいたように、どんな支援が必要なのか、あるいは、それが現実的にどれぐらいの程度できるのかということも含めて、ほかにもご発言いただければと思います。

いかがでしょうか。

○岩崎委員 地理的・経済的事情から自立支援が難しいという問題がある中で、最近思ったのは、車の中にY o u t h +（ユースプラス）の空間をつくる移動事業に力を入れていたと前回お聞きしたのですが、それをもっと拡充して、一つの拠点から出発して、交通の便が悪いところまで、こちらから出向いて若者たちへ支援をし、そこでまず人間関係をつくり、本当に支援が必要だと思ったら車にその若者を乗せてきてしまえば、若者は交通費がかからないと思いますし、もっと気軽にY o u t h +（ユースプラス）という存在を知っていただけるのではないかと思います、発言しました。

○永浦部会長 大人にはちょっとした交通費でも若者にとっては結構大きいお金で、今、私は、旭川に住んでいますけれども、バス代をかせぐために結構長距離を歩くのです。でも、そこで友だちとわいわい話しながら向こうに着くのも楽しみだみたいな、そこでいろいろなものが生まれたりするので、現実的な交通費がかかりませんというものもすごく魅力になるかなと思います。

ほかはいかがでしょう。

これは5番にも関わってくると思うのですが、もし総合センターが行っているような自立支援事業を今の活動センターにも拡充するとなると、人員の部分で全く同じ機能というものは難しいですね。そのあたりで、事務局からでも松田オブザーバーでも結構ですので、現状について何かお話しいただけたらと思うのですが、いかがでしょうか。

○オブザーバー（松田） 今、若者支援総合センターはこの会議室の隣にありますけれども、そこに自立支援拠点があって、国の委託事業、札幌市のヤングケアラー、子どもの貧

困対策など、いわゆる施設の管理運営とは別に支援を必要とする人たちの相談員が詰めていて、そこは20人体制です。

そこから派遣するのがいいのかはまだ分かりませんが、今のところ、活動センターにいるスタッフは施設の管理運営で、交流活動を通じながら話を聞いて、そうか、あしたも頑張っていこうみたいな、専門的な知識やスキルではなくて、エンパワーメントしていくというところ止まりで、そこから話を聞いて必要であれば、ここにつなげるという設計図になっているのです。ただ、ここにつなげるというところで、行っておいでと言っても、やはり行かないので、各拠点で話を聞いた後に、ここから出向く形がいいのか、何かしら専門的な知見を分けていく必要があるかなと少し思っているところです。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 私からも申し上げます。

ここに書かせていただいた①から③までを総合センターで備えているというところで、もう少し紹介をさせていただくと、①の相談に関しては、今、4.5畳ぐらいの広さの相談室が四つあります。

それから、②の訓練は、ヨガのような体を動かすようなプログラムだったり、ものづくりをするような五、六人ぐらいで参加するようなプログラム、それから、あとは対人訓練で最初は少人数でお話をしていただくなど、その方の対人コミュニケーションの困難の度合いによって幾つかコースがあったりする、そういうものが3種類ぐらいあります。そして、そのほかに就職活動をしたい方に向けては、もう少し実践的な職業理解をしていただく、そして、かなり求職に特化したものとして履歴書を書くなど、何種類かやっています。総合センターでは、ほぼ毎日、何らかのプログラムが実施されています。

現在、総合センターが①②の機能を提供する上で、今申し上げたハード・設備、そして、人材、ノウハウ、それから、今言った20人というのはLINEや電話相談の対応も含めてのことですから、それがそのままここに書いてあることとイコールにはならないかもしれないのですが、それなりのスキルと人数が必要になるということです。

今、札幌市内全域の必要量に対してこの体制でやっているの、それを五つでやるとして、単純に等分に分けていくのか、それとも、今、松田オブザーバーが言ってくれたように、人を派遣する形なのか、あるいは、もっと違う手法があるのか。例えば、自立支援をセンター以外でやるとしても、やる中で何かの役割分担というか、グラデーションをつける、人を派遣するやり方もありますし、別の方法もあるということを考えてときに、どういうやり方が、今現在の技術も活用してあり得るのかというご意見をいただけたらと思っておりました。

○永浦部会長 シンプルに分解して人的な部分をやっていくのかということですね。

3番目はロビーのことですが、ロビーは入口としてすごく大事だと。これからの在り方を考える上で、センターになくはないものというところですが、ロビーの在り方を見ると、どんな役割が必要か、何が必要かというところを踏まえて、どういうものを考えていくかが次のところになります。今の自立支援をどういう形で広げていくの

か、一つ目の切れ目のない支援をするためにどういう機能が必要なのかがそこにつながっていくことなのかなと思います。

今、二つ目の地理的・経済的な事情から自立支援事業に結びつかない若者対策というところでお話をいただいているのですが、次に移らせていただきます。3番以降でも、1番、2番と関係してくるところがありますので、ご自由にご発言いただければと思います。

では、事項の3番目、これからの若者支援施設のロビーはどのような役割を果たし、そのために、ハード面でどのような整備が望まれるかということで、ロビーが果たすべき役割、提供すべき機能、役割・機能を果たすために必要となるハード、施設の設備、この2点についてご意見をいただきたいと事務局から説明がありましたので、ご発言をお願いします。

○荒木委員 私は、今回、豊平若者活動センターに大学生を連れていって、最初は授業だから単位のために嫌々行っていたような子が、行ってみたら楽しくて、こんな場所があることを知らなかった、もう少し近くにあればいいのにな、みたいなことを言っていたのを見て、やはりもっと相互扶助みたいなもの、例えば、大学生は大学生自身も支援される対象ですから、だからこそ、もしかしたら中高生と一緒に関わることで思いがけない気づきが得られかなと思うのです。自立支援では、診断や専門的な知識が必要で大学生が絡んでしまうと逆に問題が生じてしまう危険な部分もあると思うのですけれども、入口のロビーでしたら、相互扶助も含めて、まず大学生がお話を聞いてバックにユースワーカーや専門的な方がいらっしゃるという仕組みをつくれば、人員的に増えてにぎわいも生まれると思うので、大学生の活用をぜひ考えていただきたいと思いました。

多くの学生は、社会の役に立ちたいのです。でも、どういうふうに始めていいかが分からないので、そういう入口としても、若者支援施設は有効ではないかなと思いました。その意味で、ハード面でもサテライトで大学や児童会館にロビー的な場所を開くと、ロビー自体はもっと数を増やすことができるのではないかなと思うので、ぜひ今ある施設の活用を提案したいです。

○永浦部会長 ロビーの機能でスタッフとして大学生の協力を得るところは、対人援助に就きたいと思っている大学生であれば、授業でトレーニングを受けたりすることもできるので、そういうところと連携して行っていくというのは私も非常に重要ではないかなと思います。

私は、今、教育大学で授業をしていますけれども、教育大学に来る学生は、学校が好きで、勉強も人間関係もそこそちゃんと頑張っていた子たちなのです。それで、先生になって今の多様な子たちや家庭を見ると、やはりギャップでショックを受けてしまうのです。リアリティーショックというのですが、自分には難しい、何もできないかもということが起きてしまうのですよね。ですから、そういう意味でも、学生のうちからいろいろな立場の人たちと関わるという経験しておくというのは、大学卒業以降の支援スタッフの育成という意味でも非常に有効ではないかなと思います。

それから、この若者支援施設のロビーがどういう役割か、どういう機能かについてはこれから考えるのですけれども、若者支援施設ではなくても、ロビー的な役割ができる場所をいろいろと見直してみてもどうかというご意見もいただきました。そういう意味でいうと、全部の区や地下鉄の駅にというのは難しいけれども、少しでもそこに近づけるというのは意味があるのではないかとこのところでご意見をいただきました。

ほかにいかがでしょうか。

○金委員 私は、施設見学をする前は、ロビーというのは一体どういうところかなとずっと思っていました。ロビーとは基本的には入口であって、人と待ち合わせる場所というイメージがあったので、実際に見ないと、どういう場所なのかが分からなかったのです。その意味で、この場所という名前を誰もが分かりやすい名前、つまり機能的な場所の名前に変えたほうが若者にとってはより分かりやすいかなと考えていたのです。

それで、実際に行ってみたら、ある意味、フリースペースであって、広場、時には若者のアジトという機能があったので、そういう意味で、ロビーよりはみんながすぐ分かるような名前に変えたほうがいいかなということがまず1点です。

もう一点は、自由自在の空間という意味合いがあるということであれば、やはり固定した場所ということももちろんいいのですが、中には机などが変形可能なフレキシブルな空間づくりというものがよりいいかなということが2点です。

最後に、我々の自立というものが本当に何を意味するかということが気になったところで、頼りっ放しではないということの意味するのであれば、やはりその空間の中で若者が自発的にグループをつくったり集まりを形成するといった目的を持ったら、我々が言うロビーの本当の意味になるのではないかなと思います。

その目的、名前の変更が可能かどうか、空間の中で机などの自由自在な変形が可能かどうか少し気になって、そういうような提案が必要かなと思っていました。

○永浦部会長 まず、名前ですね。ここはロビーという実際のハード面の整備ですけれども、看板を変えるだけでも変わってくるところはすごくあります。

もう一つお話しいただいた中で私も気になっていたところですが、机を固定するのではなくフレキシブルに活用できる機能は、やはり時代によって変えられるということが非常に重要かなと思います。今の意見は5番にもつながっていくのですけれども、これから長くやっていく上で、時代の変化に合わせていろいろな形を変えられるほうが長く役に立つかなと思います。

資料2の8ページ、9ページで、滞在時間と機能のニーズやスタッフとの関わりのクロス集計表を事務局にご用意いただいているのですが、見てみると、やはり1時間から3時間ぐらい滞在している人は、10分から1時間という人より居場所のところが増えているのです。そこから3時間以上になると、やはり成長したいというこの青色の12.3%というふうになっています。

先ほど大澤委員もお話ししていたように、よく分からない人に相談するのはすごくハー

ドルが高いなど。だから、ロビーに来てもらって、1時間ぐらいいたら何かできるという滞在の時間を考えて、だんだん慣れていくと、ここにはこういうスタッフの人がいるのだ、結構話を聞いてくれるな、こんな仲間がいるのだとなったときに、今度は活動から自立の支援につないでいくという役割を果たすというところで、大体、どれぐらいの時間、どれぐらいの年齢層に滞在してもらおうと、どういうところにつなげるのか、さらに、そのためにはどういうハード面の整備が必要なのかというところを考えるポイントになるかなと思います。

やはり3時間以上いると、ゲームなど、単純な雑談よりも関わりが増えるのですよね。軽い相談というものもやはり1時間以上いると増えてきます。さらに、資料1の3番には、支援者ヒアリングで食支援というものが入っていて、生活が不安定というところで、フードバンクと連携して軽食を提供するとなっています。

視察に行ったときに、やはりカウンターがあって、簡単な飲み物や軽食が提供できる喫茶店みたいなものがありました。豊平はすごく印象的だったのですけれども、すごく必要だと思ったのは、さっと来てさっと自習して帰るというよりも自然と会話が生まれたり、食べ物、飲み物があると、では、3時におやつが出るからちょっと長くいいかなというふうになるという意味で、このハード面で簡単な飲食ができる、そういうものが提供できるというのは必要になってくると私は考えています。

それに関連して、ほかの部分でも結構ですので、いろいろとご意見いただけたらと思います。

いかがでしょうか。

○岩崎委員 ロビーの活用方法ですが、まず最初に若者が来てロビーで職員や施設について知るうちに相談事になっていって、上の支援施設につなげると思うのですよね。でも、若者の立場からしてみると、ふだんロビーを使っている若者は2階の支援施設のことは全く知らなくて、2階の職員とも関わりがほぼないですし、2階のスタッフの人なのだというぐらい本当に知られてないのが現状だと思うのですよね。そういう中で、総合センターにつなげるといって、若者にしてもやはり行きづらいということがまた生じてしまうので、やはり日頃から支援施設の職員のことも知っているというか、触れ合えるような時間があるロビーになればさらにいいと思います。

今、2階にもスペースがあると思うのですけれども、そこを何も使っていないときに開放して第2のロビーのようにすれば、もし支援が必要になったときに、2階にいるあの職員だと言えば、実際に支援される若者も安心して利用できるのではないかと思います。

○永浦部会長 ロビーまで来て、その次につなぐために必要なところですね。

支援者ヒアリングの中でもありましたが、ロビーと事務室の距離や位置関係ということで、今いただいたご提案はすごく大事だなと思いました。例えば、事務室が全くクローズドではなくて少しスタッフの顔が見えたり、挨拶できたり、会話ができたりすると。ただ、事務室ではある程度クローズドな話をしなければいけないと思うので、完全な密室ではな

くてパーティションぼくするというつくりという意味で、そうなってくると、必然的に広さも必要になってくるのかなと私も思います。

ほかにございませんか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 岩崎委員に今の質問の趣旨を確認したいと思います。

おっしゃりたかったことは、例えば、ロビーを支援の入口にするといいつつも、利用者側からすると、今の総合センターのつくりだと1階と2階の機能分けが結構明確なので、これから目指すべきものは、そこがもう少し融合されたような空間で、今はたまたま1階と2階が物理的に離れてしまっているのですが、例えば、支援につなげていくことを目指すのであれば、そこに出入りする職員の流れなども含めて、1階と2階がボーダレスになるような仕掛けがあるといいというふうな理解でよろしいでしょうか。

○岩崎委員 そうですね。1階と2階が融合したような感じです。今はすごく分けている感じがあって、ロビーにいるスタッフに、もしそういう相談があったときにどうしますかという話をしたことがあるのですけれども、そのスタッフとしての認識としては、もしそういうものがあつたら2階につなげるのが僕らの仕事と割り切っていたので、すみ分けをしっかりとするのでなく、重なり合うような指揮命令系統になればいいのかなと思っています。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） ハードだけではなくて、スタッフの動き方も含めてということですね。

○岩崎委員 全体的な流れを通して、そのほうがいいのではないかなと思います。

○永浦部会長 クローズドだと、守られるのですけれども、不安はあると思います。

ほかにございませんか。

○オブザーバー（松田） まさにおっしゃるとおりです。

フロアが別なのは単純に広さの問題で、私たちも地続きでありたいと思いながら、やはり階段を上っていくところに一つハードルがあるよね、これがさらに地下だったら、より難しいだろうなと思っております。本当に、物理的なことは大きいですね。

一方で、相談に来て人目が気になるような人は、1階のにぎやかなところを通らずに上がれることがありがたいと言うので、また別に入り口があるなど、ハード面の工夫はありながらの地続きはおっしゃるとおりだなと感じていたところです。

もう一点、これも私の意見ではなくて、さっきの歴史的なものでいうと、勤労青少年ホームですから、自立支援という言葉ではなくて就職支援からスタートしたのですが、就職支援は職にあてがうみたいであまりにも狭いということがあって、就職ではなくて就労支援という言葉に切り替わったのです。ただ、結局のところ、就労でも狭いので、自己実現支援か、自立支援かということで、何となくふわっと就労支援から自立支援という言葉に生まれ変わっていったのです。でも、そこもまた何かを達成しなければいけないと取られてしまうという意味では、さっき金委員の話にもありましたが、結局、自立とは何だとい

うところもございまして、自立支援という言葉も私たちも迷いながら置いているところ
です。言葉の背景には、そういうところがあります。

もう一点申し上げるなら、ロビーというのは、その中で目的が不明瞭な段階でも使える
場所で、運動をする体育室、バンドをやっている音楽室、相談したいここの2階ではなく
て、まだ自分の中でも何がしたいかが分からない、目的不明瞭段階における自立支援ス
ペースとしては最高のものですから、その名前と位置づけをどうするかということはまさ
にそうだなと思います。目的が不明瞭でも使えるというのが若者段階においてはとても
大事な機能だろうということも、皆さんの議論を聞いて、現場の感覚と一致したこととし
てお伝えしたいと思います。

○永浦部会長 現状をお話しいただいて、ありがとうございます。

今のところ上がった中では、さっきの切れ目がないではないですけども、かちつと分
けないという部分と、ある程度の機密性というか、安心なスペースの部分の部分が大事とい
うことと、もちろんハード面もそうですけれども、そこに掲げる看板を何にするか、内容的
にも自立支援というと、何か頑張りなさいと言われるのかなみたいなのところがありますが、
さっき荒木委員がおっしゃったように、自分らしくできるものを行っているのだなとい
うことが見えやすいようなつくりといったところで意見を出していただいて、少しずつま
まりつつあるかなと思います。

皆さん、いろいろ視察もされているので、ここがきっと一番思いがあるのかなと思うの
ですが、ほかに何かございませんか。

○大澤委員 やはり、ロビーは必要性が非常に高いということと、金委員とお話をしたの
ですが、韓国は若者支援の取組がすごく進んでいるので、見習うべきところがたくさんあ
ると思うのです。

金委員とお話ししたときに、ロビー活動というものは日本の大きな特徴的なところで、
こういう形のやり方があるのだとおっしゃっていて、やはりそう考えると、日本の若者支
援活動の一つの大きな特徴と位置づけられるような非常に大事なものだと思いましたの
で、ロビー機能を一つの機能としてちゃんと位置づけておくというのはもう譲れないと
ころかなと思いました。

特に、職員と同世代の仲間たちとの具体的な関わりができるということがすごく大事で、
それはやはりオンラインでは代替できないのですよね。実際に場所と空間と時間を共にす
るというのが根本にあって、それがどうしても難しいときの補完的なものとしてオンライ
ンを考える必要があると思うので、やはり具体的にロビーがあることが大事だとい
うことは、私たちとしては何回も言うておく必要があるかなと思いました。

やはり、具体的に会うということの大事さを考えたときに、さっきの2番に戻ってしま
うのですけれども、若者支援事業の拡充の①②③の機能がありまして、少なくとも①の専
門的な相談というものをオンラインで今の若者活動センターが提供するというよりは、や
はり会って話ができて時間と空間を共にできる職員に相談ができるというのがすごく大事

だと思います。①の専門的な相談に関しては、具体的に若者活動センターに支援機能を拡充するのとスタッフを配置することが必要かなと思いました。

話がずれてしまうのですが、②の訓練の機能はフルタイムで置けばいいのですけれども、フルタイムで置くのが難しければ、ここの部分は水曜日にありますよとか木曜日にありますよというふうな巡回的な形で機能させることもあり得るかなと思います。少なくとも、①の専門的な相談に関しては、全面的にオンラインで代替するというのはやはり現実的ではないというか、機能性が低くなってしまうと思いますので、この部分はちゃんとスタッフを配置する形で若者活動センターに支援事業を拡充していくことはあっていいかなと思いました。

○永浦部会長 今のお話は、ロビーともすごく関わってきまして、専門的な相談員が今の総合センターだけではなくて広げるということであれば、それ相応のロビーや事務室のつくりになったり、今の訓練の機能というところで外部からお願いするのであれば、個別に部屋があったほうがいいのか、それとも、切れ目なく何かパーティションみたいなものでその都度区切ってやれるのか、ロビーの中でやっていて、あっ、あれは面白そうだなとか自分もやってみることができるのだなと見られるようなことが必要なのかとか、すごく大事な部分かなと思いました。

出会うというところでは、私は、この前、飲食店で食事をしていたら、大学生か専門学校生の子たちが誕生会をやっていて、お店の人がケーキを持ってきて、ハッピーバースデー歌ったのですね。そうしたら、みんなお酒も飲んでいるので、自然とほかの席の人もハッピーバースデーの手拍子をして、そのお祝いをしてもらった子が、皆さん、すみません、ありがとうございます、20歳になりましたと笑っていたのです。でも、それは、まさに集って自然に起こっていることですよね。

今、結局、コスト削減でオンラインでできることはオンラインでいいのではないかという風潮です。もちろん、それを有効に活用することも大事ですけれども、自然と対面で起こる仕掛けとか力は、これまでのロビーや若者支援施設での対面や仲間との集いだからこそできた事例をボトムアップで上げていくことで、今、大澤委員からお話しいただいたような対面の大切さは提言できるのかなと思いますので、お願いいたします。

今、3番のロビーの話をしながら、どういうふうに機能を有していくかという2番の部分も含めてのお話をしておりますが、これは4番の機能というところにも関係があるかなと思うので、そちらに移らせていただきます。

4番目に、区の保健福祉部門とっそう有機的に連携し、支援の相乗効果を発揮していくためには、どのような方策が考えられるかが挙げられています。

先ほどの事務局の説明として、現状で、若者支援施設と区の保健福祉部では、対象区域が異なるなどの課題がある中で、どのような体制となつて、どのような仕組みを講じれば、ここの連携が進むのか、そして、若者支援施設と保健福祉部門の支援の相乗効果を発揮できるのか、このあたりについて提言をいただきたいということでした。

ご発言等がある方は、よろしくお願いいたします。

○大澤委員 最初の2番のところで、支援事業の拡充という方向性を議論しましたが、支援機能の拡充を考えたときに、区の保健福祉部門との有機的連携は絶対に必要だと思います。児童福祉分野でいくと、区の家庭児童相談室、生活困窮分野でいくと、生活保護部門や生活困窮部門と連携をつくっていくことを進めていく必要があると思いますので、これは現状でできていない部分があるとすれば、すぐに連携の事例を積み重ねて拡大していくという方向性が必要かなと思います。

そう考えたときに、どうしたらいいかと思うのですけれども、単に連携をしましょうという話だけをして、多分、現状とそう大きく変わらなくて、連携をしたほうがいいと言われたので連携をしませんか程度の話だと、なかなか連携が進まないと思います。何かきちんとした政策というか、制度というか、事業として福祉部門と生活困窮部門と総合センターとの連携事業というものをやる必要があるかなと思います。

例えば、モデル事業をやってもらおうという形で、いきなり全体でみんなで連携しようみたいな話をして、各個別に何かばらばらと連携したりしなかったり、途中で立ち消えになったりというものが多分一番問題だと思います。

例えば、ここに書いてある中央区と若者支援総合センター、北区とアカシア若者活動センターは比較的連携事例が多いということです。中央区と若者支援総合センターでの連携モデル事業を一つちゃんとつくることと、北区とアカシア若者活動センターでいくと、若者活動センターにも支援事業を拡充しようということです。アカシア若者活動センターを北区との支援連携事業のモデルケースとして、二つぐらいのモデルケースを進める中で実質的に事業、制度としての連携の下準備ができるような仕組みを提言するというのはあってもいいかなと思います。

○永浦部会長 連携は、言うは易く行うは難しで、実際に連携しようといっても、理論レベルではできても、現場レベルでは問題が山積するので、きちんとモデルとして示すということで、今は比較的連携の事例が多いのであれば、モデルケースをつくって、今後考えていくのが必要ではないかというお話をいただきました。

ちょうど視察に行ったときとか今までの会で、複合施設というところと連携がうまく使えるのではないかみたいな話もありましたよね。例えば、ほかの自治体で保健福祉部門と若者支援部門が同じ建物の中にあって、こんなところがあるのだと気づけると。宮の沢には教育支援センターが入っていますよね。実際に視察に行ったときも、多分、相談に来ているのだろうなという親御さんとお子さんがいて、帰りにロビーの前を通っていたのですね。例えば、そういう子たちが高校生や働いたときに、そういえば、あそこにあんなところがあったよな、面白そうだな、卓球しに行ってみようかなと思うかもしれません。そういう意味で、さっきの1番、2番にも絡んでくるのですけれども、当事者自身があそこなら行けるよという仕掛けもポイントだったり、そこにさっきのハード面をどういうつくりにするかというところも関係してくると思います。

ほかはいかがでしょうか。

○金委員 先ほど大澤委員がおっしゃったとおり、連携というと抽象的でなかなか理解できないこともあるかと思ったので、実際の事例を紹介したいと思います。

これは韓国の事例ですが、韓国は日本と比べて自転車に乗る子どもが少ないのですよね。それで、今、二酸化炭素低減を目的に、子どもに自転車の乗り方を指導しようということで、センターと保健所がボランティアセンターの自転車を教える方を紹介してもらって地域にある資源を活用して学校や広場でそれを教えたという連携の事例があります。そういった形にすると、すごく積極的な連携になると思うのです。

もう一つは、それぞれの施設が持っている福祉資源があるのですけれども、中で問題を抱えている子どもの事例を挙げて、それで我々の施設の中で福祉資源をどのように提供できるかという会議を定期的にやったことがあります。そういうことであれば、具体的な連携の事例として、最初からモデル事業を立ち上げて一緒にするタイプと、既に問題を抱えている子どもの事例を定義的にスタディーワークして、それをどのように解決していくかということを集団的知性で解決していくというプロセスをつくる、組織をつくるということも、一つの連携の事例かなと思っています。

○永浦部会長 当然、スタッフの方は、掲げなくても連携を意識すると思うので、例えば、今お話しいただいたように、定期的にケーススタディーをきちんとやっていますよということで、その取組をきちんとアウトプットする、事例集などで公開する機会をしっかりとつくっていく面も重要なかと私も感じました。

あとはいかがでしょうか。

○荒木委員 金委員に続いて、具体的な提案です。

この前、大学の卒業生で作業所で働いている方から、こういうことがあったとLINEで突然送られてきたのが、地下歩行空間にあるビッグイシューというホームレス支援のところにたまたま訪れて支援をしている人の事例を聞いたときに、自分もやってみたいと思って、それで、まず、自分で文章を書いて、ここで販売してもらえるように頑張ってみようと思ったというものでした。

そんなところで、一歩進んだ卒業生の話を聞いて、やはり支援の心を動かすのは当事者というか、実際に福祉支援をしながら次に進んでいるモデルをその人が見たときに、例えば、自分は当たり前だと思っていたのだけれども、自分の家庭は異常だったとか、自分は障がいとは無縁だと思っていたけれども、実際はそういう支援が必要な人だったのかもしれないなど、客観的に自分のことを見詰めて自分を問い始めるというきっかけを得られるのではないかと思います。だから、この若者支援施設の中で当事者同士が関わり合える場所をつくることができたらいいなと思ったのです。

ヤングケアラーも、家庭の問題は人から言われないと気づかないというところが多分にあると思っていて、大人たちの役割は、子どもたちが置かれている状況を客観的に判断して、それで指摘するのではなくて気づかせて背中を押すということではないかなと思うの

で、仕組みとしては、気づき合う場所を開きながら、大人たちはそれを影で支える場所として若者支援が機能するのではないかとイメージしてみました。

○永浦部会長 トー横とかグリ下、福岡にもありますが、あそこは自然に集まっているのですよね。実際にルポを見ていると、例えば、家庭に居場所がないとか学校で挫折したなど、同じつらさを共有してるからあそこで集まれていると。

ただ、問題点は、やはりそこに搾取や利用しようという悪い大人がいて巻き込まれてしまうところなのです。逆に、今、荒木委員がおっしゃったような、同じようなつらさを抱えて共有して、あっ、自分だけではなかった、話を聞いてもらえたという経験を持つ当事者同士が安全に集まれるトー横みたいなニュアンスで、おうちの人や学校の先生も、あそこだったら行っておいでと言える器は、特に、福祉や生活困窮という部分で大事なと思います。そういう意味でいうと、堅い自立ではなくて、さっき金委員がおっしゃったように、もっと集まりやすくなるような名前にすることも関係してくるかと思います。

そんなところで、持続可能とか、どんなふうにつくるかという次の5番にも絡んでいくので、それまでのところでもしあれば、この後も遠慮なくご発言いただきたいと思うのですけれども、5番目として、札幌市全体が厳しい財政状況にある中で、持続可能なかたちで施設を更新していくためには、どのような方策が考えられ、その場合、どのような点に留意すべきかに入ります。

先ほどの事務局の説明では、若者支援施設が提供している貸室、ロビー、自立支援、若者の交流促進・育成支援、この四つの機能について、拡大するか、現状維持をするか、縮小していくか、いずれの方向性が適切かということで、その場合、どういうところに留意すべきか、ご意見をいただきたいというふうに説明がありました。

四つの機能のうち、ロビーと自立支援については、これまでのご議論を伺っていると、委員の皆さんは、拡大というご認識かと理解しておりますが、それでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 ありがとうございます。

では、貸室と交流促進・育成支援について、拡大、現状維持、縮小、いずれの方向性が適切かということ、そして、その場合に留意すべき事項とか何か意見がありましたら、併せてご発言をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○工藤委員 貸室や体育館の利用は、仮に持続可能な施設として若者支援施設として縮小の方向に行くのであれば、関係の部局とも調整が必要だろうなと思うのですが、代わりに既存の施設を割引で使えるような仕組みを併せて整えていくことも考えていけたいいのかなというのが1点です。

それから、札幌市もなかなか厳しい財政状況の中で、言い方は悪いですが、お金集めができないかなと考えたときに、例えば、外部の関係機関とも連携をしたクラウドファンディング、私も勉強不足で詳しくないのですが、福岡市では、ふるさと納税をするときに、どのお仕事を応援したいか、もう少し具体的に言うと、福岡市は、福岡市立学校の

この学校を応援したいというものがあるらしくて、大したお金ではないらしいのですけれども、福岡市にも市立の夜間中学があるのですが、そういう仕組みがあって少し予算が入ってくるのですというお話もあったりするのです。

これはここだけの話ではなく札幌市全体の話になろうかと思えますし、実現可能かどうかも分からないですけれども、そんな形で市民の方から応援してもらえるような仕組みづくりもあったらいいのかなと感じていたところであります。

○永浦部会長 私も去年ふるさと納税をしたときに、どの部門に使ってほしいですかというものがありました。ざっくり分かれている自治体もありますし、今お話しいただいたように、教育、まちづくり、文化など、具体的などころもあるのかなと思います。

今、貸室のお話がありましたけれども、利用者アンケートを見ていると、貸室利用者はほかの類似施設も利用しているという人が多いのですよね。ただ、ロビーになると、これがぐっと少なくなるというところで、持続可能というところも含めて、この貸室をどうするかというのは一つポイントになるかなと思います。

皆さん、ほかにいかがでしょうか。

○事務局（浅山子ども育成部長） 今のお話の関連です。

実は、今、ふるさと納税を使って寄附金を集めて、札幌市の子ども・若者のための事業に使えるようにしようという仕組みをつくろうと考えております。ちょうどグッドタイミングでしたので、お話しいたします。

子ども未来基金みたいな基金という形で、ふるさと納税を通して選んで入れてもらってお金がある程度たまりましたら、札幌市のいろいろな施策に配分をしていこうと考えております。お金がある程度たまるまで、まだ時間がかかると思うのですけれども、仕組みとして考えておりますので、ちゃんと軌道に乗るように頑張りたいと思います。

○永浦部会長 ちょうど同じ取組があるのですね。

幾ら集まったらライブをするというところがありますよね。あの施設がグレードアップしますみたいな、チャレンジ的な面白いものをやると、話題になるかもしれないなと思ったりしました。

皆さん、ほかにご意見等はいかがでしょう。

○大澤委員 今、若者活動センターは、ロビーがあって、貸室があって、体育館があって、相談室があって、活動室があって、フルスペックでうたっているわけですよね。可能であれば、フルスペックで建て直してほしいと思うのですけれども、多分、それは無理なのですよ。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 厳しいですね。

○大澤委員 どうしてほしいかと言われて、フルスペックで維持更新してほしいと思いますが、それが無理だということであれば、現実にはどこかに間借りして自分たちの占有スペースを持つことになるかなと思ったときに、ロビーと相談室と活動室ぐらいは必ず確保する必要があるということと、今のところに建て直せなくて、いずれにしろ移動し

なければならないと考えたときに、その場所をどこにするかという、やはりもう少し交通の便がいいというか、前回の最後に皆さんと少しお話ししましたが、冬になると自転車と徒歩の人が減るという、来なくなるということがあるみたいですので、冬場でも来られるような場所に間借りをするなり何なりして移っていくというふうに整備していく必要があるかと思います。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 現に利用している岩崎委員からも、この件に関してぜひご発言いただければと思います。

○岩崎委員 ご指名いただき、ありがとうございます。

支援者ヒアリングの利用者団体の意見は僕が言った意見だと思うのですが、この件に関して言いたかったのは、僕は、大学生の頃からずっと小学生向けの体験イベントのボランティアに参加していて、社会人になったときに札幌でもやりたいなと思ってY o u t h +（ユースプラス）に相談したところ、まずは職員も入るから一緒にやってみようよというお言葉をいただき、それで、団体としての3年間の育成プログラムということで、子どもの育成や児童福祉分野に興味のある若者を募って、職員と一緒に小学生を集めて、秘密基地づくりであったり、月1回みんなでただただ公園などに行って遊ぼうという会を3年間通してやってきたのです。

ただ、3年間経ったときに、自立を目的としているので、職員は4年目以降はつけないということで、さあ、どうしようかと、僕を含め、ボランティアの若者で話し合ったときに、僕らで小学生を集めるのは無理だとなって、同じく利用している若者との交流を深めようということで新しく団体をスタートさせて今に至っています。

当初は、利用者を集めるだけでも本当に苦労した小さい団体だったのですが、今になっては、それこそ、オホーツク紋別の教育委員会とコラボレーションできるような大きな団体になりまして、すごく貴重な体験をさせていただいたのですよね。

ただ、全体としては、この3年間のプログラムを使って自分のやりたいことをやっている若者は本当に一握りといいますか、僕の知っている限りでも数団体、多くても四、五団体ぐらいしかないと思うので、今後、ここをもう少しプッシュして、アピールポイントではないですが、自分がやりたいことをサポートしていただきながらできるぞということをもっと広めていっていただければ、多分、そういう若者はたくさんいると思いますし、少なからず、若者にやりたいことやらせてもらえと言うと響くと思うので、ここに関しては今後ともぜひ力を入れて周知していただけたらと思います。

○永浦部会長 交流促進・育成支援も、縮小するのではなく、広げていってほしいというところですね。もちろん、それをPRして、こういうことができるのだとニーズのある人に伝えていくことは非常に重要ではないかというご意見をいただきました。

ほかにいかがでしょうか。

○オブザーバー（松田） 今日は若者支援施設の歴史の語り部としてここにいるのですが、この交流促進と育成支援は何か分かるような分からないような言葉かなと思って

います。

当時、勤労青少年ホームだったときに、もう要らないのではないかと言われたときに、働いている若者のご褒美として、ただで体育館や音楽室を使っていいますよということだけではないのだという文脈の中で、仕事帰りにバスケットボールをしに来ている若者と、茶道を習いに来ている和室の若者が交流をして、異業種交流ならぬ余暇の時間の中で出会いを広げていますという取組を推進したのが交流促進です。

育成支援機能の基は、ただバスケをしに来ているわけではという中で、その若者たちがいろいろなボランティア活動に参加していますというのですが、正直に申し上げますと、それは私たちが必死にそちらに誘導しました。当時、みんなは、仕事をして疲れながら、やった、バスケができると来ているのに、何でもまたボランティアをやらなければいけないのだという話をされましたが、それは、ここは札幌市が建てている施設で、君らはその恩恵にあずかっているのだから、そういうふうにして社会に恩返ししようよという生々しい話も何度もしました。ですから、ただの息抜き、余暇、遊びではなくて、育成支援というものは後づけですけれども、そういった社会貢献にもつながっていると。

何が言いたいかというと、体育館を使いに来ている人が交流や育成でボランティアにつながるということで、体育館は必要だったのです。

ただ、今、岩崎委員がおっしゃったように、働いている若者の余暇活動の場だけではなくなくなったとするならば、ロビーを起点としていろいろな交流だったり社会参加のきっかけはきっとできるのだなど。以前は、体育館がなかったらそもそも若者が来ないので、体育館が始まりの交流だったり育成支援であったということです。

とはいえ、体育館は要らないというわけではないのです。今、岩崎委員がおっしゃられた子どもたちの活動で、みんなで運動しようとなったときに、やはり体育館が必要です。それが今までだと自前でできたけれども、体育館がない施設であれば、工藤委員がおっしゃったように、その活動でどここの体育館を使うときに少し減免があって、若者支援施設で生まれた取組の中で市の体育館を使わせていただくという流れがもしかしたらあるのかなということをお伝えさせていただきました。

○永浦部会長 体育館も一つの貸室と考えると、当時は必要であったけれども、いわゆる交流促進・育成支援に結びつくための活動として、現状の若者はどういうものがいいのか、どういうもののニーズが高いのかということで、実際のハード面の貸室の数や大きさ、あるなしということと、もう一つは、もし必要になったときにどこかを借りられると。自分では連絡しづらいけれども、こういうものがやりたいのだよねという話をしたら、では、連絡してみようかとおつないでくれるというところでも大分ハードルが下がるのかなと。

今のお茶とバスケットもそうですが、スケートカルチャーがそうなのですよ。スケートボーダーとカメラマンがいて、トリックを決めたときに自然にその写真を撮ると、それがいわゆるスケートボード雑誌に投稿することでトップになる。もともと違う活動をしているけれども、そういうところでチームが生まれたり、そこがムーブメントになったりと

いうところで、活動と活動、興味と興味が自然にクロスするようなものがあると、さっき岩崎委員が言われたような、仲間が集まって次のところに結びつくみたいな面も、特別、このために何かを拡大にしなくてもハード面以外の部分でもできるのかなと感じた次第です。

さっき、荒木委員が挙手されていまして、お願いしてもいいですか。

○荒木委員 今、厳しい財政状況の中で縮小しなければいけないところがとあったのですが、けれども、せめて1か所だけでも全部そろっている、例えば、この大通の若者支援総合センターだけは全部の機能を残して、やはり20年後のモデルとして提案したいです。

というのは、私は、クリエイティブということにすごく興味を持っていて、戦後、いろいろな文化の中で大事なシーンが変わってきています。消費社会からコミュニケーション社会になって、これから始まる何十年かはクリエイティブが社会をつくるという本を読んだのです。

クリエイティブというものは、結局、コミュニケーションと違って、個人の力がすごく大事になってくるという意味ですけれども、クロスカルチャーといいますか、自分が好きなことを社会の中で広めようと思ったら、どうしたって1人ではできないから、ほかの人と関わらなければいけないし、自分の好きなコンテンツでもって人と関わるという大変高度な社会になっていくと思うのです。そういったときに、何か若者たちが新しいことをしようと思って、ぱっと見たときに、雑多なものがないと生まれないと思うのですよね。そういう何でもありみたいな場所が絶対に必要で、ロビーというものは、今お話をしてきたように、絶対にそういう機能を持っていると思うのですけれども、ロビーだけだと、ここまで話してきたように、何か支援が必要というときに、ぱっとフットワーク軽くできなかつたりすると思うのです。何かあったときに、やはりフットワークが軽い形でいろいろな支援につながっていくとか広がりがあるというモデルを札幌市はぜひ一つ残していただいて、それで何十年かたったときに、多分、いろいろなものが機能整備されていくと思うのですよね。その中で雑多な昔ながらのレッツの文化を引きずっているような昭和の取組が実は一番よかったかもしれないというモデルをつくっていただきたいので、私は、1か所でいいから、その雑多なままで残していただきたいということを提案したいです。

○永浦部会長 温故知新といいますか、でも、非常に大事なことで、これがいいと思ってぐるっと変わると、結局、大事なものがみんな忘れていたというところが起きてしまうと思います。ぼんぼんぼんぼん新しいものをつくったり、駄目だったから壊して建て直しましょう、作り直しましょうというものではないというところですね。

もう一つ、今、私が荒木委員の話を聞いていて思ったのが、例えば、外部に何かがあるとなると、そこで一回温度が冷めてしまうのですよね。では、これやってみようかとなったときに、例えば、体操をやってみようか、でも、体育館がないから来週予約するからねって言ったら、来週ならいいわとか、来週集まったときにはそのときのモチベーションが下がっていると。多分、これは現場の最前線にいる松田オブザーバーが一番分かるかなと

思うのですよね。そうなったときに、フルスペックで一番大きいモデルをつくれる、それは全部のところでできないけれども、ほかのセンターではこれがないからそれをこんなふうに工夫してみましたよというふうにつながっていくという意味で、全部平等にではなくて、どこはというふうに残すということは、持続可能な部分というところでつけていくべきなのかなというご意見でした。

ほかにもいろいろとあると思うのですが、時間が参りました。

次は3月ですから、それ以外にもこういうものがあればという意見がありましたら、各委員から事務局に連絡をして集約していただくという形になるかと思うのですが、よろしいですか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） はい。

○永浦部会長 委員の皆さんも、それでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 ありがとうございます。

それでは、本日の議事はこれで終了いたしまして、進行を事務局にお返ししたいと思います。

3. 閉 会

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 部会長、委員の皆様、本日も活発なご議論をいただきまして、ありがとうございます。

それでは、事務連絡を申し上げます。

今、部会長からございましたとおり、本日、もし言い足りないことや言い忘れていることがございましたら、事務局にご連絡をいただきたいと思います。

その上で、皆様から頂戴したご意見を、事務局で整理いたしまして、次の部会は、このような内容で間違いなかったか等々、確認していただくような場にしたいと思います。

次回の開催は、3月5日水曜日午前10時から、また同じこちらの会議室で開催することとさせていただきますので、ご予約の確保をよろしくお願いします。

それでは、以上をもちまして、第4回の部会を終了いたします。

本日も長時間にわたってご審議いただきまして、大変ありがとうございました。

以 上